―六つの技の系譜から―

富士精工　経営管理部
主幹　堀部　徹哉

今日の愛知のものづくり産業を見渡すと、六つの基幹的な技の存在を確認できる。すなわち、「土」「木」「金属」「布」「食」などの素材加工に関わる技、そして、「からくりとすり合わせ」という機械工学に関わる技である（名古屋市『産業の名古屋』などをもとに筆者が編成）。これらは愛知の地域特性と密接に関わりつつ、ときにそれぞれが単独で、ときに複数が連携して各時代のニーズに応じた製品を多数生み出してきた。

以下、六つの技の系譜をたどり、1600年にも及ぶ愛知ものづくり史のアウトラインを描き出してみたい。

① 土を焼く技

古墳期、窯炉で高温焼成する須恵器が朝鮮からわが国に伝わると、高温焼成に耐える陶土、燃料用木材、窯炉設営に適した丘陵のそろう愛知でもその生産が始まった。これより南北朝期までの間、尾張と三河を分ける猿投山の西南麓一帯に展開された古窯群を猿投窯と呼ぶ。飛鳥期には、猿投窯の須恵器は供膳具や貯蔵具として全国各地へと運ばれており、相当な量の生産が行われていたようである。

平安初期になると、中国の越州窯青磁を模したわが国唯一の灰釉陶器が生み出され、猿投山西南麓一帯は窯業の先進地となる。その後平安後期には、猿投窯のうわぐすりの技は瀬戸窯へ、大形の器を焼く技は常滑窯へと引き継がれ、ともに地域のブランド製品へと成長していった。

しかし織豊期以降、瀬戸窯はいわゆる瀬戸山離散、常滑窯は織田信長の発した禁窯令により低迷の時期を迎える。愛知の窯業が完全復活するのは江戸後期のことで、瀬戸の染付磁器、常滑の朱泥陶器や白泥陶器、尾西の七宝焼、三河高浜の瓦といった新製品の誕生がきっかけとなった。

明治期になると、それまで日用品を中心としてきた愛知の土を焼く技は、時の起業家たちのアイデアのもと、生活インフラ分野（土管、れんが、タイル、衛生陶器、ガイシなど）へと本格進出し、わが国の近代化を支えた。また、コア分野の日用品についても、海外向けの白磁洋食器やノベルティなどを誕生させ、製品バリエーションの充実が図られた。

さらに戦後になると、陶磁器の焼成法がファインセラミックス製品の製造工程に応用され、産業資材（機械製品や電子機器などの機能部品）という新分野の取り込みに成功した。

古墳期に誕生した愛知の土を焼く技は今も現役を貫き、地域の発展を支え続けている。

古代愛知のブランド製品「猿投窯の灰釉陶器」（写真提供：みよし市立歴史民俗資料館）

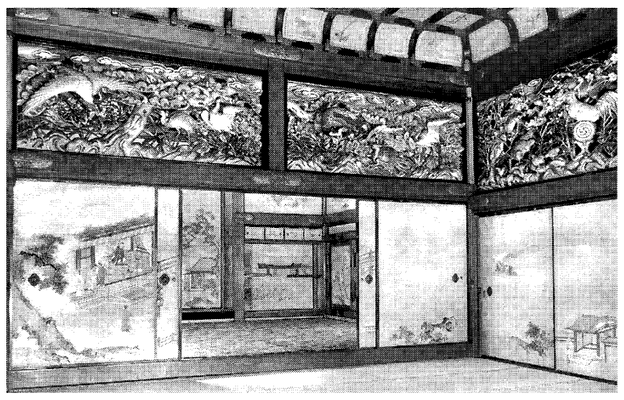
② 木材を加工する技

木材は万能の素材としてほんの1世紀ほど前まで、日用品から生活インフラに至るさまざまな分野で活用されてきた。この木材加工の技が本格的な産業として愛知に根づき始めたのは江戸初期のことである。天下普請として名古屋城が築かれた際、優れた大工や工芸師が西国から名古屋に流入、定着した。また、同じ頃、初代尾張藩主・徳川義直は自身の婚礼に際し、父・家康から支度料として良質な木材の採れる信州木曽山を譲り受けた。こうして木に関わる優れた加工の技と良質な素材が尾張領内にそろった結果、本格的な木材加工業が興り、日用品だけに限っても、神仏具、たんす、木おけ、楽器といった多彩な製品が生み出されている。

愛知に根づいた木材を加工する技は明治期になっても途切れることなく引き継がれた。例えば、三味線製作を職芸とする尾張藩士の家に生まれた起業家によりバイオリンメーカーが創業され、この系譜からは後にギターメーカーも誕生している。

また、尾張の木おけ職人の家に生まれた起業家によりわが国初の合板が開発され、家具や楽器だけでなく、飛行機の機体やプロペラの素材としても活用された（戦後はパチンコ台にも流用）。あるいは、木と鉄の混製が主流であった黎明期の機械製品（西洋時計、織機、鉄道車両など）にも関連ノウハウは大いに転用され、機械産業発展の一翼を担っている。付け加えると、この頃、接着剤などに端を発した化学工業が愛知にも芽生えているが、これを主導したのも木材に関わる技に他ならない（時計メーカーなど）。

産業振興に際して、万能の素材を加工する技がいかに有効な経営資源となり得るのか、以上の事例から読みとることができよう。



愛知の木材加工の技の原点「名古屋城本丸御殿の欄間」（写真提供：名古屋城総合事務所）

③ 金属を加工する技

古来より金属素材とこれを加工する技は、豊かな生活（鍋、釜、包丁など）や効率的な仕事（鋤、鍬、鎌など）を実現する大切な存在であった。このため、鍛冶職や鋳物師は時時の権力者の統制下に置かれ、発祥の地に根ざして技を磨き、これを後世へと伝えていった。

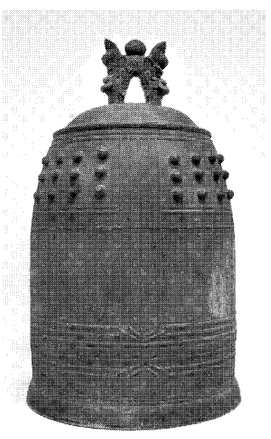
こうした動きは尾張でも見られる。鎌倉期、近江の鍛冶職が知多大野谷（知多市―常滑市）に移住して武具製作を開始、江戸期になると農鍛冶や舟鍛冶に転じて最盛期には185軒の職人集団となった（大野鍛冶）。明治期以降は徐々に衰退するも、戦時中に織機メーカーから分社した鍛造メーカーが知多に工場を構えるなどして、大野鍛冶の技は地域の技として今日に引き継がれている。

西三河にも同様の事例がある。江戸初期、近江の鋳物師・国松十兵衛が三河大浜（碧南市）に移住し鋳造業を開始した（碧南鋳物）。江戸中期には、同じく近江の鋳物師・太田庄兵衛が三河平坂（西尾市）に定住している（平坂鋳物）。青銅製の神仏具に始まった両地域の鋳造の技は、後に鉄製の鍋や釜などにも広がった。そして、明治期以降は農機具や機械部品へと展開され、今日までその系譜をつないでいる。

あるいは、かつて尾張鍛冶や水野鋳物の存在した名古屋市、中尾鋳物の存在した豊川市においても、往年の金属加工の技は、戦時中の兵器、戦後の機械製品やその部品の製造を通じ、地域内で引き継がれている。

精錬技術が進歩した20世紀、金属は木材に代わる万能の素材となり、機械製品への活用が進んだ。愛知がこの流れに乗ってわが国屈指の機械産業の集積地となったのも、県内各地に蓄積され、メーカー各社により引き継がれた金属加工の技あってのことなのである。

（次ページへ続く）



江戸期、西三河に根づいた鋳造の技「国松十兵衛（六代）光重作の喚鐘」（碧南市松江区所蔵）

拓いてきたのは未来、
創ってゆくのは希望。

名工建設株式会社
名古屋市中村区名駅1-1-4 JRセントラルタワーズ34F
TEL 052-589-1501（代）FAX 052-586-1926
www.meikokensetsu.co.jp

JTBは
挑戦します！

感動のそばに、いつも。

Keep an evolution
JTB Central Japan Corp.

旅行業から
交流文化事業へ

株式会社 JTB中部
法人営業名古屋支店
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-17-19
キリックス丸の内ビル7F
TEL.052-211-6701

Ⓟ Ⓡ

若手技能者の育成促進と技能尊重機運の醸成を目指して

「町工場技能者コンクール」閉幕

中小企業の若手が腕を競う「町工場技能者コンクール（中小企業若手技能者競技大会）」が 13 日、閉幕した。表彰式会場では「旋盤」「機械製図」「電子機器組立て」の各職種の入賞者が発表された瞬間、喜びの声がわき起こり、選手らは達成感にあふれた表情を浮かべた。

モノづくり立県・愛知の明日を担う若手技能者集結

町工場技能者コンクールは、次世代のモノづくりを支える人材の育成を図るため、愛知県が開催している。若手技能者の育成（技能伝承）の促進と、技能尊重機運の醸成を目的に、技能五輪に参加しにくい中小企業の若手技能者を対象としている。今回は12、13の両日、今年4月に開校したばかりの愛知総合工科高校（名古屋市千種区）で開かれた。

12日に行われた旋盤職種には、15人が参加。「かなりレベルの高い課題」（澤武一主査＝芝浦工業大学デザイン工学部准教授）に、選手たちは取り組んだ。難しい課題だっただけに、選手たちは苦戦したようだった。その中で、冨田圭一選手（鬼頭精器製作所）が見事、優勝を果たし、準優勝に仲上和志選手（瑞木製作所）、第3位に森雅人選手（日鉄住金ハード）と続いた。

13日は機械製図職種が実施され、16人が競技に参加した。河合優主査（設計・教育研究所代表）が準備した課題にもとづき、選手たちは知恵を働かせ、CADを用いて図面を書き上げた。見栄えも含めたさまざまな観点から採点を行った結果、鈴木賢太選手（バイナス）が優勝となった。準優勝に梅本健斗選手（同）、第3位には山田拓実選手（明和eテック）が入った。

電子機器組立て職種も同日に行われ、5人の選手が参加した。電子基板の組み立てや配線、動作といった基本的な部分のほか、選手による提出品のプレゼンテーションも採点項目に加えた。同職種は優勝者のみの選定だったが、「トップと次点の差がほとんどなく、決定に難航した」（大久保陽一主査＝電子技術指導センター社長）。結果、成瀬貴臣選手（中日本炉工業）が優勝の座を射止めた。

大村秀章知事を囲んで入賞者たちが記念撮影

旋盤職種優勝の冨田圭一選手（鬼頭精器製作所）

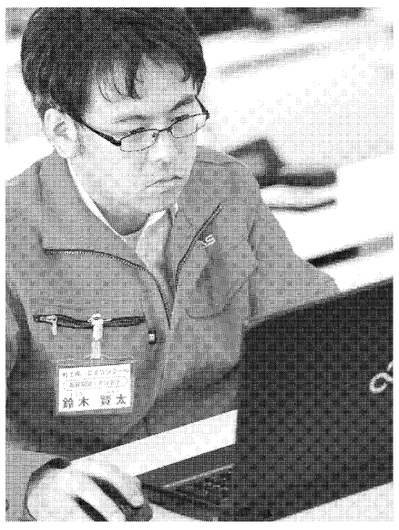
大村知事から選手たちに熱いエール

また、同日には併催イベントとして、愛知県内の高校生を対象とした「U18作って回そう！ 手づくりコマ大戦」も開かれた。旋盤を使って支給された材料でコマを製作し、「どれだけ長く回るか」をルールに競い、8校17チーム（29人）が参加した。

トーナメント形式で競い、優勝に岡崎工業高校の「岡崎工業Bチーム」、準優勝に同校の「岡崎工業Cチーム」、第3位に愛知工業高校の「チームドスコイ」が輝いた。また、アニメ「機動戦士ガンダム」のメカニックデザインで知られる大河原邦男氏がデザインや工夫の面で優れたコマを賞する「大河原邦男賞」には、岡崎工業高校の「岡崎工業Aチーム」が選ばれた。

同日16時半から表彰式が行われ、各職種の優勝者には「知事賞」、準優勝と第3位の選手には「日刊工業新聞社名古屋支社長賞」として、表彰状とメダル、副賞が贈られた。

表彰式の最後に大村秀章知事が「今後、より一層腕を磨いて愛知県のモノづくりをけん引してほしい」と参加選手にエールを送り、若き技能者たちの熱き戦いが幕を閉じた。



機械製図職種優勝の鈴木賢太選手（バイナス）

電子機器組立て職種優勝の成瀬貴臣選手（中日本炉工業）